

暗い流れ 和田芳恵



河出書房新社

暗くらい流ながれ

©1977

著者 和田芳恵 装幀者 多田進 発行者 佐藤皓三

昭和52年4月25日初版発行／昭和53年1月13日5版発行
〒162 東京都新宿区住吉町九五 発行所 株式会社 河出書房新社

電話東京(355) 5311 (代表) 振替東京0—10802

印刷 暁印刷株式会社 製本 加藤製本株式会社

定価は函・帯にあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

暗い流れ

「文藝」昭和五十年十月号より、昭和五十二年新年号まで十六回連載

仕事の必要から『近代日本総合年表』を開いていたのではなかった。ただ漫然と見ていて「ハレー彗星、地球に最接近。日本でも流言・噂、不安をよぶ」という記事に出合った。明治四十三年五月十九日付けの社会欄である。同じ政治欄に五月二十五日付けで「宮下太吉、爆発物製造の嫌疑で松本署に逮捕される（大逆事件の大検挙始まる）。」、六月一日付けで、「湯河原で幸徳秋水逮捕。以後八月まで、和歌山、岡山、熊本、大阪でも関係容疑者逮捕」の記事が出ていた。

明治四十三年と言えば、私は数えの五つであつた。

北海道山越郡長万部村字国縫（おしやまんべ）という内浦湾に面した小さな村に生れた私は、大逆事件の事は何も知らないが、ハレー彗星の騒ぎに就いて、はっきり覚えてゐる。

ハレー彗星の長い尾が地球に触れそうで、もし、そんなことになったら、地球上の生物は全滅するという噂が村中に流れた。

新聞を取っている家から、ハレー彗星の流言がひろがり、わかり易い言い方で女、子供の耳にはいったのだろう。子供の私が虚無的な気分になり、この世も終りかと嘆いたりした。

ハレー彗星とはグリニッチ天文台長エドモンド・ハレーの観測で、約七十六年を一周期として出現することがわかったため名づけられたが、ハレーはハリーとも言われた。金指正三著『星占い星祭り』の中に「彗星」という項目があつて、「彗星は和名ハキボシ、妖星といわれ、この星があらわれると、災害をもたらすものとされ、上代・中世を通じてこの星ほど天下上下の人心を動揺させたものはない。『日本書紀』に舒明天皇六年（六三四）八月、「長星南方に見^まわる。時の人彗星という」が初見であると書かれている。天文道では、光芒の形、色で、どういう星か判断し、天文書を見て、その変を占った。朝廷では、その災を除くため、神仏に祈ったという。

この著書の中に次のようなハリー彗星のことも出ていた。

「彗星の御祈りに、僧侶多数を朝廷に請じて読経させたことは前に記したが、久安元年（一一四五）四月五日あらわれた彗星は、光芒長さ一丈ばかりで、六十日間つづいた。これはハリー彗星である。左大臣藤原頼長の日記『台記』には、宮廷における彗星に対する動静が事細かに記されているが、そのなかに仁和寺法親王覚法が、御鳥羽の御所において孔雀経法を修して彗星を消そうとしたが、消えたかと思うとまた出現するので、修法がなかなか結願^{けつがん}に至らず、延引に延引を重ねた。法皇は親王の歎きをなぐさめるため賞を賜わったところ、俗人これを名づけて「星出

賞」といったとある。彗星が消えるというのは、天候の具合によって見えないことであり、軌道を遠ざかってゆくことを知らなかった当時のことであるが、修法によって消える筈のない彗星を消すために請ぜられ、世の嘲笑をかった人ほど氣の毒なものはない。頼長も「彗星なお消えず。孔雀經法（仁和寺法親王）またその驗なし。弘法・慈覺の兩門、すでに地に墮つるの世か。あゝ哀しい哉。」と記しており、やはり法力で彗星が消えると思っていた。彗星があらわれてから二ヵ月余りのちの六月七日の条に、

師安來たりいふ。去夜彗星見えず。去月廿六日夜、天晴れ彗星見ゆ。その後毎夜陰りて有無を知らず。去夜晴に属すと雖も見えず。この間大僧都定信、禁中において仁王經法を修す。驗ありというべきものか。先日の大法等（孔雀經法）、全くその驗なし。仁王經の時に至って始めてか。孔雀經は驗なくして賞あり。仁王經は驗ありて賞なし。

とある。

彗星のうちで、ハレー彗星ほど騒がれたものはなからう。大逆事件は、なんとなく口にするのも恐れはばかられたらしい。権力の中にひそんだ重苦しい感情が、沈黙を強いたと考えられる。国道沿いの村はすれを流れている国縫川に木造りの橋が架っていた。橋の袂に鍛冶屋があって、煙突が屋根を突き抜けて高く伸びていた。夜空に赤く、煙突から火の粉が噴いているように見えた。

「あれ、なんだろう、ね」

弟を背負った母が、私へ問いかけながら、たちどまったり、歩いたりして鍛冶屋のほうへ進んで行った。小さな私から満足な答えが出るはずはない。みかん色の星が同じ色の長い尾を引き、星空に貼りついて無気味に輝いていた。

「源次が夜業するはずもないのに、……あれはハレー彗星か」

鍛冶屋の息子の源次は軍隊から戻されて来たが、頭の働きがにぶって、仕事に精を出さなくなっていた。誰かに殴られたせいらしい。大人のくせに私たちの餓鬼大将になって、遊びまわっていた。

二つ年下の弟の修平は小児喘息が持病であった。発作がおきると激しく咳込んで仮死状態になった。顔は土いろに変わり、からだがぐったりするので、いつも、弟は死ぬかもしれない私は思った。

母の素肌丸裸の修平がおぶさっていると、やがて、発作はおさまった。

河口から海へ流れ出てゆく川水が、内浦湾から押し寄せる波とぶつかりあって、ほの白く泡だっていた。

橋の欄干に倚りかかって、母は駒ヶ岳のうえあたりのハレー彗星を遠く眺めていた。

私の眼をのぞきこんでから、母の眼はハレー彗星へそそがれた。私は母の眼に連れられてハレー彗星を見たが、これは、いやなら、見なくともいいときのいつもの母の癖であった。

「あら、あら、大へん」

と言いながら、母は両脚をひらき、少し前屈みになって、きものうしろを掴みあげた。母の脚を伝わって、橋板に修平の小便はしみひろがった。

私も身におぼえがあった。眼がさめて、途中で気づくのだが、わざと眠ったふりをして、母の背中へ小便をした。じつくりと丸裸の私も濡れてきて、母の背中から両脚を伝わって小便が逃げてゆくらしかった。

母の背中に触れたままの私の筒先から尿がほとばしるのは、いい気持であった。

弟に母の手がかかるようになって、私は姉^{あな}やのシモに見てもらうようになった。シモは国縫から近い茶屋川という村の農家の娘だった。

シモは、きものをきたままの私を背中へ括りつけるだけであつたが、私は自由に動かせる足で、まるみのあるシモのふりんとした尻を、ぼんぼん弾みをつけて叩いたりした。

女中部屋でシモが私を抱いて昼寝したことがあつた。きものをきたまま、畳のうえに寝ていたが、シモの股のあいだに私の片方の足首がはいり、熱い軟かな湿った裂目へ斧を打ち込んだような形になった。

シモは、ほっと声をあげて、私の足首をはさみつけたが、どうして、私が、こんないたずらをしたか、わからない。

「誰にも言つてはだめよ」

締めていた前掛で、シモは、ねばねばした私の足首を、ていねいにぬぐってくれた。

シモは浅黒い肌の女の子で、頬のあたりに雀斑があった。小学校を出たばかりで、うちへ来て、二、三年は家事を手伝っていた。髪は桃割に結って、身ぎれいにしていたが、きものの襟がよごれないように、日本手拭を巻いていた。これがシモを、しっかり者に見せたが、祖母と二人で地味に暮してきたせいらしい。

「シモ、どうしたかな」

小学校にはいった年の秋、茶屋川までの遠足があった。私はシモに逢いたくなっていた。

「さあ、どうしたろうかね、シモはお嫁に行ったかもしれないよ」

母は海苔巻の弁当を作りながら、シモのことに触れたがらない様子であった。

私たちの眼の前から、急にシモは姿を消した。シモの祖母が訪ねてきて母となにか話していたが、いっしょに連れ帰ることになったらしい。

「なにか、あったんだろうね。わからないけどさ」

私が、しつこく問いただすと、三つ年上の姉は考えあぐねたように言った。

私の家は荒物雜貨類や食料品などをあきなっていたから、人手があまるということはなかった。脛が出る短いきものをきたシモは働き者であった。

「さよならもいわないで、出てゆくシモではないもの」

感情をこめて、姉は言ったが、シモの考えでなく、大人たちの話しあい、いなくなったと思っ
っているらしかった。

「ねえちゃん、シモのところに行ってみるか」

「そうだね、先生がいいと言ったら、いっしょに訪ねて、いろいろ聞いてみようよ」

私はシモに逢えるかもしれないと興奮していた。

複式学級なので、校長を入れて四名の教師に引率された生徒たちは、短い列になって、秋草の茂った瀬棚街道を歩いて行った。

野葡萄を見つけて、争って採って食べたり、また、茸をみやげに探す生徒もいた。一、二年男女組の私たちは担任の女先生の傍から離れてはいけないう事になった。

「つまらない」

口をとがらせて、オランダ焼屋の健蔵が言った。健蔵のところで売っているオランダ焼は、軟らかな厚焼の煎餅で、カステラのような味がした。担任の八木あや先生の好物であった。

「健ちゃん、葡萄を採りに行って、ばったり熊と出合ったら、どうしますか」

冬眠前の支度熊が暴れまわっていた。

八木先生は健の毬栗頭を撫でながら、私たちのほうを見た。

私は八木先生の顔いろから、自由にシモのところへやってもらえそうもないと思った。昼の弁当を食べおえると一、二年生は昼寝をすることになった。

帰るも歩くことになるので、休息が必要だと八木先生は考えているらしかった。

澄みあがった空に淡い昼の月が出ていた。丘の草原に寝ころんで、シモのことを思いながら、

私は名も知らない草を引き抜いては棄てていた。根が深いらしく、指に巻きつけた細い茎に抵抗が伝わってきた。

私たちは討死したように、思い思いのほうを向いて、転がっていた。

「吉ちゃん、ここにいたのね」

草原に膝を落して、私を覗きこむシモのうしろに姉のツルがたっていた。姉がシモを迎えに行つてきてくれたらしい。

「吉ちゃん、逢いたかった」

シモは私が子供だから言えると思つたらしい言葉をかけ、手を取つて起きあがらせた。

見ないうちにシモは娘らしくなつて、まぶしいようであつた。

私はシモに言いたいが、たくさんあるようであつたが、どこから、なにを話すか見当がつかない気持で、押し黙っていた。

「シモちゃん、泊りがけで遊びにおいでよ」

ツルがすすめたが、シモは謎のような含み笑いになってから、考え込むように下を向いた。

私は吉平という名だが、みな、吉ちゃんと呼んでいた。うちでいっしょに暮していたときは、いつも、吉平さんとシモは、改つた呼びかたをした。だから、吉ちゃんと声をかけたのは、シモの親しい気持を見せたのだと私は思つて、満足していた。数えの八つの秋で、私は助平などという悪口もおぼえ、吉平という名がきらいでたまらなくなつていたから、吉ちゃんではなくて、

吉公と呼ばれても、よかったのかもしれない。

シモは私たちとは少し離れたところにいて、運動会の真似事をしたりするのを眺めていた。長いきものをきたせいとか、シモはおとなびた感じになったが、いうことは子供らしかった。

「誰にも言わないほうがいいのよ。また、面倒なことがおきますからね」

別れぎわにシモは姉と私に約束させたりした。西陽があたって、シモの齒は、金で縁をつけたように輝いていた。

「達者でさえあれば、また、きっと会えますからね」

私は涙が出そうで、こんな辛い思いをするのも、シモが好きだからにちがいないと考えていた。

店からあがる利益で、どうやら、生活ができたらしい。私のきょうだいは五人だが、上の二人は夭折した。

「手がかかるのは、いつも赤ん坊だから、順繰りに育てたんですね」

と、母が話しているのを聞いたことがあった。乳を飲ませたり、抱いたり、おぶったりする赤ん坊は、親の眼は届くが、他は投げ遣りで、年上のきょうだいの世話になった。

母は店の運営にも、頭を突っ込んで、子供たちの世話を焼いていた。

父は、いつも、店と別枠の事業をしていたが、長続きしなかった。あきつばいたちでないが、損をしたり、失敗して、新規の仕事をはじめた。

茶屋川の近くで、父が澱粉工場をはじめた。函館本線の八雲は尾張の徳川家が開拓した町で、澱粉製造も大掛りにやっていた。馬鈴薯から採る澱粉は水飴の原料にもなって需要が多いということであった。

父は水車のついた草屋根の古い農家に寝泊りして、澱粉を作っていた。日雇の農婦もいたが、夜は父ひとりになって乾燥室のボイラーに石炭をくべていた。

良質の日本紙をはった木枠の折に、湿った澱粉を拵げて乾燥するのだが、折を重ねて乗せる柵もできていた。

私は小学三年生になっていたから、澱粉工場へ行って、父の手伝をしようと思った。

「吉平になにができるか、そのうち、探しておくよ」

私の願いをはぐらかして、父は連れて行く気がなさそうであった。

どうしても、工場を見たいと思った私は、学校を早引けして、ひとりで出掛けた。

茶屋川へ着いたら、工場のある場所はわかるはずであった。

シモがいるかもしれないと、私は思ったが、考えるだけでも無駄なことだとあきらめた。

遠足のあとで、姉といっしょにシモのところへ会いに行ったことがあった。

母にだまっていたから、ふたりは秘密で出掛けた。シモが好きだった羊羹を小遣をだしあつて買ったりした。

祖母が、ひとり、縁側へ出て、日向ぼこしていた。

「シモはいません」

と、姉にいうだけで、耳が遠いせいとか、こちらの質問には、ちっとも答えてくれなかった。

私が姉にお菓子を出したら、教えてくれるかもしれないと言った。

「取引につかうなんて、商人の子は、それだから嫌い」

姉は私を辱かしめるように言い、さあ、帰ろうと願をしゃくった。

私は悔しくてならなかった。

姉が食べながら、私にもすすめる羊羹を、どうしても断っていたが、歩いてきた道の傍に坐って食べていた。

いつもは、金を出しあって買った蒸羊羹などは、正確に物差をあてて切ったりする姉も、袋ごと私へ押しつけて寄こしたりした。

シモを探すことは、あきらめてしまった。

茶屋川の澱粉工場にたどりついたとき、父が馬鈴薯の買だしに出掛けて留守だった。

女たちが空き樽に入れた薯をゆすって、水を流しながら、砂をおとしていた。

四、五人の女たちに、なにか注文をつけている女は、頭に手拭をかぶって顔を包むようにしていたがシモであった。

私が気づく前に、シモは馬鈴薯を積んだ山をわたって、近寄ってきた。

「まあ、吉ちゃん、よく、来てくれたね」

シモは手拭を取って、上わっぱりの埃を払ってから、

「ここでは、あんまりだから、わたしのうちへ行きましょう」

と言った。

シモを拒絶する反応が、私の心に芽生えた。なんとなく、不潔な気がした。シモのうしろに父が、おぼろげに姿を見せてきた。

「風呂へはいって、さっぱりなさったら」

シモは裸になってから、私の前にしゃがんで、きものの紐を解いてくれた。前がひらかないように私たち子供のきものは紐がついていた。まだ、男にならない私が、豊かに成熟した女の前で、力みかえっているのは喜劇的であった。

「さあ、いっしょにはいりましょう」

こんな世話は、シモがうちにいるときもしてもらい、つい、いままでも、シモといっしょに入浴したいと思っていた。

「おばあちゃん、どうしましたか」

「奥の納戸に寝ています。いつか、吉ちゃん、姉さんといっしょに来てくれたんですってね。あの頃、函館のほうに行っていたの」

シモは首のあたりまで湯につかりながら、手拭で首筋や耳の裏のあたりを洗っていた。シモが、うちにきたときからの癖だった。一日の苦勞が洗いおとされるようであった。